

武蔵野日曜集会

わが時わが教

——ヨハネ伝第7章1～24節——

1994年11月6日

小池辰雄

魂に満ちることをそのまま語る わが時 汝の時 無者キリストは神一切 十字架に架かる時
私を飲みかつ食らえ キリストの中に直入直結 天の時 神の教 主さま! アーメン

【ヨハネ7:1～24】

1この後イエス、ガリラヤのうちを巡りい給う、ユダヤ人の殺さんとするに因りてユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり。2ユダヤ人の仮庵の祭ちかづきたれば、3兄弟たちイエスに言う『なんじの行う業を弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。4誰にても自ら顕れんことを求めて隠に業をなす者なし。汝これらの事を為すからには己を世にあらわせ』5はその兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。6ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。7世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作の悪しきを証すればなり。8なんじら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』9かく言いてなおガリラヤに留り給う。

10而して兄弟たちの、祭にのぼりたる後、あらわならで潜びやかに上り給う。11祭にあたりユダヤ人等イエスを尋ねて『かれは何処に居るか』と言う。12また群衆のうちに囁く者おおくありて、或は『イエスは善き人なり』といい、或は『いな群衆を惑わすなり』と言う。13然れどユダヤ人を懼るるに因りて誰もイエスのことを公然に言わず。

14祭も、はや半となりし頃イエス宮にのぼりて教え給えば、15ユダヤ人あやしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書を知るか』16イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。17人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。18己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真なり、その中に不義なし。19モーセは汝らに律法を与えしにあらずや、然れど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆえ我を殺さんとするか』20群衆こたう『なんじは悪鬼に憑かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』21イエス答えて言い給う『われ一つの業をなしたれば汝等みな怪しめり。22モー



セは汝らに割礼を命じたり（これはモーセより起こりしとにあらざ、先祖より起こりしなり）この故に汝ら安息日にも人に割礼を施す。23 モーセの律法の廃らぬために安息日に人の割礼を受くる事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健かにせしとして我を怒るか。24 外貌によりて審くな、正しき審判にて審け』

●魂に満ちることをそのまま語る

今日はヨハネ伝7章1節から24節までで、『わが時わが教』と題してお話します。

1この後イエス、ガリラヤのうちを巡りい給う、ユダヤ人の殺さんとするに因りてユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり。

「ガリラヤ」はガリラヤ湖の西側と北側の方で、よくキリストが行かれた所です。「ユダヤのうち」はもちろんエルサレム中心の所。ここはやがてキリストが十字架に架かる所で、エルサレム中心の所にはキリストは、時がくるまではいらつしやりたくないわけです。

「ユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり」

とはそのことです。南の方のエルサレム中心のユダヤには、時がくるまでは行かない。ガリラヤというのは非常にキリストの親しい我が家のまわりみたいな所です。レバノンの山も見えるでしょうし、そこでもってキリストは告白された。

私は説教とはあまり言いたくない。キリストは自分の体験を基としたところのことを語る。これが告白です。人を教えようとしている教えはダメです。大事なのは告白なんです。自分の魂と心にあふれているものをそのまま語るものが告白です。日曜も私は聖書の解釈をしているのではない。聖書を通して私は告白しているわけです。いわゆる、お説教だとか、解説だとかは私にはあわない。告白は——アウグスティヌスの『告白』という本がありますね——心に、魂に満ちることをそのまま語る、これが人をうつ。ところが、何か理屈を、あるいは説明をしようと思つて語つていくことは人の魂には響かない。人間の魂というのは本ものに応えるので、作られたものは人間の魂にうったえない。

文を作るという作文というのはいい言葉ではない。つくるなら、創作、創造でなければ。ゲーテが

「自分の文学は全部、自分の告白である」

と言つた。さすがはゲーテです。ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』もそうです。あれは素晴らしい小説です。あの中にやはりユゴー自身が出ている。ロシヤのドストエフスキーやトルストイの文学がやはり告白的文学です。

聖書は、キリストの言葉は全部告白です。預言書もそうです。

「止むを得ずして、止むに止まれずして語るものが本ものだ。至誠というものは止むに止まれずして語るものだ」

と西郷南洲も言っている。南洲というのは素晴らしい人です。大自然そのもののような人



です。

●わか時

²ユダヤ人の仮庵かいはんの祭ちかづきたれば、

「仮庵の祭」というのはレビ記23章に出ている。

「イスラエルの子孫に告げて言え、その七月の十五日は結茅むすまゐ節ふしむすなり、七日のあいだエホバの前にこれを守るべし。首はしらの日には聖会を開くべし、何の職業もなすべからず。汝等また七日のあいだ火祭をエホバに献ぐべし、而して第八日に汝等の中に聖会を開きまた火祭をエホバに献ぐべし。是は会の終結おわりなり、汝ら何の職業をもなすべからず。」(レビ23・24～26)

とある。幕屋の祭です。こちらでいうと、4月、春です。もちろん、エジプトから出てきたから後の話です。

³兄弟たちイエスに言う『なんじの行う業わざを弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。誰にても自ら顕ひかれんことを求めて隠ひそかに業をなす者なし。汝これらの事を為すからには己を世にあらわせ』

キリストの兄弟なんてのは、全然分かってないものだから、余計なおせっかいなことを言っている。キリストはもちろん、エルサレム中心のユダヤに行つてはつきり自分をあらわして、十字架に架かることをちゃんと予見しておられた。「わか時」というのはそのことです。

⁵はその兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。⁶ここにイエス言い給う『わか時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。⁷世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作しわざの悪しきを証すればなり。

「汝らの時」というのはこの世的な時のことです。「世」と「汝ら」は一緒ですから、味方だと思つている。キリストは天国的な靈的な次元から仰るから、世には通じないし、誤解をされたり色々なわけです。

「わか時」というのは本当は逆説的な言い方です。私はキリストのことを「無者」と言っている。「無者キリスト」「無の神学」の無というのは私が無いことです。虚無ではない。無私です。我々は何か言うときには、「私は…」と言うのは仕方がないけれども、その「私」が無私の私でなければダメなんです、自己中心では。ところが、今の教育は小学校から自己中心が多い。私たちが小学校で教わっていた時には、先生中心だった。先生が絶対だった。小学校のときに、

「お前はどうか思うか」

なんて言われたことがない。

「これに従い、これを守れ」

と、なにしろ、先生中心でした。我々の小学校のときには、全く先生が絶対でした。だから、



と言う。この無の姿は平伏しなんです。無とは何ぞや、それは平伏しである。キリストの前に平伏さない者はダメです。「私の信仰は」なんて言つて、自分の信仰をサムシングにしていたらダメです。そんなものはくたびれてしまう。ぶつ倒れて、ぶつつぶれる。キリストがゲッセマネで平伏して祈っているあの姿です。デューラーが描いたあの絵が私は大好きだ。ゲッセマネでキリストが平伏して祈っていたら、天使が現れた。

私は、

「信仰なんかありません」

と言う。直結される。キリストに直結しなければどうにもならない。キリストを信じ仰いだつてダメなんです。そんなものはくたびれてしまう。よく

「あなたの信仰は…、私の信仰は…」

なんて言う。それは信仰をサムシングにしている。そんなものはダメだ。私は無信です、信仰なんかありません、直結させられています。これはキリスト直結だから、本当の力の世界、本当の光の世界、本当の生命の世界です。

「キリストを信じています」

なんて私は言わない。

「キリストは神の子である。贖罪者である」

なんていう事柄を信じたつて、どうにもならん。

いわゆる人間的に立派なんでものはダメなんだ。人間はボロでいい。私にいろんなことを言う人があるが、私はそんなことはひとつも気にしない。キリストが

「よしっ」

と仰るその一言だけでいい。無者キリストです。そして、キリストに無者にされている無者、小池ということ。あなた方一人一人がそういう意味における無者なんだ。我れ無き者です。

● 十字架に架かる時

「わか時わか教」というのは、神さまから示されている、賜っているわがです。キリストの自分のわがではない。間違わないようにしてください。自己が立つようなわがではダメなんだ。この「わか」という言葉は躓きの言葉だ。

「先生、先生」

と言つて、いわゆる先生中心ではだめだ。

「先生と呼ばれるな」

とキリストが言っている。先に生まれたという意味で先生なら、それはそれでいい。

本当の天的な現実というものを知らない一般の人たちは、学校の教授であろうと生徒であろうと、本当はお気の毒なんだ。本当の世界を知らないから、相対界でもつて何だかんだ言っている。相対界なんかどうだつていいんだ。



ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、

キリスト自身は、「あなたの時」といつて神さまに向かつて言っているわけだ。あなたが表したもう時、命じたもうその時。十字架に架かる時が「わが時」です。

相対的な現実としては、キリストは十字架に架けられた。けれども、キリストはいきなり天界に行くことができる人だから、何も十字架を通る必要はない。ただ、キリストはイザヤ書53章の預言を全うするために十字架に架けられた。

「彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、この「碎かれ」が十字架のことです。

みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり。

これが贖罪の十字架です。

われらはみな羊のごとく迷っておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものもの不義をかれのうえに置きたまえり。」(イザヤ53・5)

6)

「我ら凡てのものもの不義をかれの上に置きたまえり」

というのは素晴らしい言葉です。これが一切の罪を負ったところのキリストです。「罪」とは自我のことです。

「われらに平安をあとう」

という。この平安とは大事なことです。平和は人間関係の間の暖かい間柄ですが、平安というのは縦の関係です。まず平安がなければ本当の平和はこない。ところが、普通は平安なしの平和ばかり言っている。個人関係でも社会関係でも国際関係でも

「平和、平和」

と言っている。そんな平和は当てにならない。

「本当に平安があるか、神との縦の関係がたっているか」ということです。

縦の柱がなければダメなんです。家は横の板がいくらあつたつて、縦の柱がなければ、風に吹きとばされてしまう。縦の柱が平安を与えるもの、神との関係です。神・絶対者——仏教なら、お釈迦さんでも如来でもいい——その関係がなくて、本当の宗教をもたない者は本当の安らぎをもたない。この縦の関係が、神・キリストとの関係がちゃんと立っている人は、どんな事にでつくわしても、へこたれない。嵐が来ようが、大雨が降ろうが、一向差し支えない。生活上の色々な事件がありましても、この縦の関係がしっかりたつていると、環境を変えることさえできる。

とにかく、神・キリストの生命が、力が体现されなくては。キリストの力を体で現するような人でなければ、クリスチャンなんて言えない。



「私はキリストを信じてます」

なんて言ったつて、それはひとつもクリスチャンでも何でも無い。本当のキリスト者というの、キリストを体現する現実をいただいている体現者です。キリストを全存在で現する。これが証し人、本当の証者です。本当の証し人は体現者です。体現者でなければ本当の証し人ではない。説明なんかしている世界ではないんだ。

●私を飲みかつ食らえ

集会でも一番いいのは、聖書を皆さんとじっくり二、三回読んで、それで後は祈っておしまいいい集会が一番いい。私は何も言う必要はない、言うだけ余計なことだ。聖書というのは無駄がないから、説明すると無駄になってしまう。だから、聖書は読むのではない。

「聖書を食べなさい、食らいなさい」ということです。キリストは、

「私を飲みかつ食らえ」

と言った。キリストはやはり凄い。

「わが生命を本当に受けとれ」

ということを、「私を飲みかつ食らえ」なんて言った。ヨハネ伝4章13節に、

「13 イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。14 然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』」

これは何を言っているか普通の人には分からないね。

15 女いう『主よ、わが渴くことなく、又ここに汲みに来ぬために、その水を我にあたえよ』16 イエス言い給う『ゆきて夫をここに呼びきたれ』17 女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い給う『夫なしというは宜なり、18 夫は五人までありしが、今ある者は、なんじの夫にあらず。無しと云えるは真なり』19 女いう『主よ、我なんじを預言者とみとむ。20 我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』21 イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。22 汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。23 されど真の礼拝者の、霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父は斯のごとく拝する者を求めたもう。24 神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』25 女いう『我はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、彼きたらば、諸般のことを我らに告げん』26 イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』……

こここのところは素晴らしい会話だね。



28ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいう、²⁹「来りて見よ、わが為しし事をことごとく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか」
 30人々町を出でてイエスの許にゆく。³¹この間に弟子たち請いて言う『ラビ、食し給え』³²イエス言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』
 33弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち来りしか』³⁴イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。』
 (ヨハネ4・13～34)

●キリストの中に直入直結

もう、ケタが違います、次元が。キリストのは本当の霊的現実というんです。相対的な現実ではないですよ、これは霊的現実です。これはビリビリ、力がくるね。だから、本当に霊的現実を体験しようと思ったら、自分がキリストの中に入らなければダメです。ぶっ倒れて、キリストの中に自分を投げ入れる。どこに棄てるかというのと、キリストの中に棄てるんです。我というものをキリストの中に棄てる。キリストの中に自分を棄ててしまおう、そうしたら、力が来てしようがない。

「何と不思議なことだろう、信仰でも何でもなかった」

ということになる。キリストの中に直結している。直入でもいい。直入直結だ。本当の棄身というのはそのことです。自分の身をキリストの中に棄てる。そうすると、もの凄い力がくる。パウロがいろいろなことを言っているけれども、パウロの色々なことを言っているのも、簡単にそれでいいんです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言ったのは、その消息です。だから、皆さんも、

「私には信仰なんかありません、直結してますよ」

と、そう言ったら、みなびつくりするよ。そういう告白をしないとね。キリストは神さまの中に――

「父の懐にいたまいし」

とヨハネ伝の始めの方に書いてある――キリストは神さまのふところに居た。我々はキリストのふところの中にいる。そういう世界です。絶信仰です、「信仰、信仰」なんて言う必要は何もない。「しんこう」と書きたければ、真に交わる「真交」と書いたらいい。

●天の時

イザヤ書53章は素晴らしい。預言書の中では、アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ、そこから素晴らしいところだ。彼ら預言者には「エホバ」が神です。「ヤーヴェー」とは「有りて在るもの」、実存者という意味です。モーセに現れた霊がそう言った。



「神モーセにいたまいけるは我は有りて在る者なり。又いたまいけるは汝かくイスラエルの子孫にいうべし、我有という者我をなんじらに遣したもうと。」(出エジプト3・14)

とある。

「我は有りて在る者なり」

この日本語の訳はいいですよ。本当に有るものは神さま、キリストだけです。我々は在らしめられる。我々が在るなんてものは当てにならない。アッシジのフランチェスコ、デンマークのキルケゴールはそういう情報が分かっている人だ。東方のキリスト教の歴史にも素晴らしい人がいた。アタナシウスとか。

「わが時」というのは本当は天の時、天的な時です。天の時、天の教です。天時、天教だ。天地というね、ところが、黙示録の終りにいくと今度は新天新地になる。この新天新地向かって我々は旅しているわけだ。ダンテの『神曲』の「地獄・煉獄・天国」の、あの天国の場所が新天新地です。

ダンテの『神曲』というのには素晴らしい詩です。私は世界最大の詩だと思っている。あれは読まなければダメです。人間のあらゆる現実が書いてある。いい加減なものを読まないで、第一級のことを熟読した方がいい。『レ・ミゼラブル』、『神曲』、トルストイの『復活』、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』。ああいう偉大な文学は日本にない。漱石なんかとてもダメです、本当の深い宗教の世界をもたなければ。

仏道であろうと、キリスト道であろうと、第一級の人物を相手にして、私は今、ある詩を書いていきます。霊的な人物の列伝です。非連続の連続です。

● 神の教

8 なんじら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』

「わが時」というのはもちろん神さまから示される時です。

9 かく言いてなおガラヤに留り給う。

10 而して兄弟たちの、祭にのぼりたる後、あらわならで潜びやかに上り給う。

11 祭にあたりユダヤ人等イエスを尋ねて『かれは何処に居るか』と言う。12 また

群衆のうちに囁く者おおくありて、或は『イエスは善き人なり』といい、

或は『いな群衆を惑わすなり』と言う。13 然れどユダヤ人を懼るるに因りて

誰もイエスのことを公然に言わず。

14 祭も、はや半となりし頃イエス宮にのぼりて教え給えば、15 ユダヤ人あ

やしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書を知るか』16 イエス

答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。』

はつきりこゝで言っている。



17人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。18己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真なり、その中に不義なし。

己の栄光を求める者はみなダメになつてしまふ。
19モーセは汝らに律法を与えしにあらずや、然れど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆえ我を殺さんとするか』20群衆こたう『なんじは悪鬼に憑かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』21イエス答えて言い給う『われ一つの業をなしたれば汝等みな怪しめり。』

「一つの業」というのは、ヨハネ伝5章に書かれている奇蹟的な業です。

「起きよ、床をとりて歩め」
だとかね。

22モーセは汝らに割礼を命じたり（これはモーセより起こりしとにあらず、先祖より起こりしなり）この故に汝ら安息日にも人に割礼を施す。23モーセの律法の廃らぬために安息日に人の割礼を受くる事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健かにせしとして我を怒るか。

安息日にも主たるものはキリストですから。我々も安息日に主たるものです。

24外貌によりて審くな、正しき審判にて審け』

6日やって、7日目に休むということはレビ記に書いてあるけれども、それはただ昔の律法であつて、安息日に何をしようと、そんなことは問題でない。キリストは人を癒してしまつた。もう何ものにも捕らわれないで、神さまの時に従つて、日曜から土曜にいたるまで、いつでもであろうと構わない。

我々にしてもそれが本当に神におけるわが時です。本当の自由業者というのはそういうことが出来る。ところが、学校の先生というのは縛られているから仕方がない。何かに相対的に縛られています、それに従つていくことは結構です。従いながら、それに縛られていない、拘束されていない自由の世界を内側にもつていなければダメです。本当の自由の世界を内側にもつていれば、どんなに制限されていても一向差し支えない。制限の中にいながら無制限をもっている。そういうようなことを言っていたのはやはりゲーテです。人間の相対的な現実においてはみな制限がある。自動車を走らせるのだから、ちゃんと軌道があつて、左側を走らなければならぬのを右側を走ったら衝突してしまふ。制限の中にありながら無制限の世界をもつこと、これは相対的な現実で本当に処す心の在り方です。

17人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。

「此の教」は「神より」のものであるというのが大事です。「わが時」というのは「わが与えられたる汝の時」ということです。



●主さま！ アーメン

我々にとってはキリストが一切です。「神」と言っただけでダメだよ、キリストが神さまの具体的な表現体だからね。「主さま」ということ。

「お父さま！」

と祈る集会の人がかなりありますけれども、それはそれで結構です。「お父さま」の中にはキリストがいなければダメだし、

「主さま！」

と言うときには、その背後に父なる神があるわけです。父なる神とキリストは離すわけにはいかん。どちらを叫ぼうが、その陰にあるものをはっきりもたないとね。キリスト抜きのお父さまではダメだし、神抜きのキリストでも困ったものだ。私はしょっちゅう

「主さま！」

です。私には主なるキリストが一切だから。十字架で贖ってください、永遠の生命をください、終末的な希望をください、そういうひとだから。キリストのことを終末的実存者と言ったことがある。「終末」というのは神さまの「新天地」のことです。世界の終りは新天地の始めなんです。我々の現在は終末的現在——ドイツ語で「エスカトローギッシェ・ゲーゲンヴァルト」——です。いつも歴史の終りの最後の質をもった現在です。相対的現在にいながら、我々は終末的現在を生きている。これが本当の信仰者です。

とにかく、キリストに捕まえられながら、キリストの中に飛び込みながら、歩けばいい。

祈りの一番簡単なのは「主さま！」の一言です。私は魂の奥で「主さま！」と言えば、一切の祈りがその中に入っている。あとは言うことがなくなってしまう。

「主さま！ 汝知りたもう。アーメン」

クダクダ言う必要はない。よく、祈りで説明している人がある。祈りの世界は説明なんかひとつも要らん。キリストにぶつかっていく。集会でも、キリストにぶつかって火の出るような気持ちでもって祈らないとね。理屈なんかを頭で考えているような祈りはダメですよ。

「我思う故に我在り」

ではないんだ。デカルトのあんな言葉はダメだ。

「我祈り入る故に我在らしめられるなり」

です。一番簡単なのは「主さま！」それだけ。「主さま！」だけで一切の祈りが入ってしまう。

「主さま！ アーメン」

でいい。そういう祈りをしなければね。

